

岡崎ルツ子作 **もみじ**
「紅葉のころに」

<前編>

テーマ 人生はドラマ、あなたが主人公です。この度も、「この指ドラマ館」によろこそ。

1(俊一の夢)

野島和代 1本、2本…また増えている。5本、6本…。

伊坂俊一 お母さん、…お母さん？

和代 8本、9本…。

俊一 お母さん！

俊一 はっ。(布団からがばっと起き上がる。)

また、あの夢か…。

ナレーション 嫌な夢を見た。幼い時の忘れられない光景。夜中ふと目を覚ますと、鏡台の前に母が座っている。30 半ばを過ぎてもシミもシワもない美しかった母が、出来始めた白髪を数えているのだ。わたしが声をかけても、彼女は一心不乱に鏡の中の自分を見つめて答えない。その顔は般若ほんにゃの面のようなだった。

間もなく母は年下の男と家を出ていった…。

わたしは伊坂俊一。大学で西洋史を研究している。商社を引退した父と 38 のこの年まで2人暮らしをしている。何人か付き合った女性はいたのだが、結婚までには至らなかった。あるいは母の苦い思い出が影響しているのかもしれない。女性は皆、表面的なものにとらわれているように感じられてならないのだ。この女性観が、かなりいびつなことは自分でも分かっていた。だが、この考えだけは決して変わることはあるまいとも思っていた。ところが、ところがだ——。

タイトル 岡崎ルツ子作「紅葉のころに」その前編。

2(大学の構内)

(効果音) (遠くでテニスの練習の音)

安部健作 先生、伊坂先生！

俊一 あ、安部先生。

安部 (駆けてきて追いつき) 足、速いですね。(荒いため息)

俊一 何か？

安部 先生になかなかお会いできなくて。いや、こんな所でなんですけど、実は結婚することになりました…。

俊一 それはおめでとう。いつ？

安部 10月です。で、先生に式に出席していただきたくて。
俊一 是非。でもいつ知り合ったの？
安部 見合いだったんですけど。でも相手、結構美人なんで、即 決めちゃいました。こっちは先生みたいなクールなイケメンと違いますから。
俊一 イケメン？
安部 選んでるんでしょう？ だっていまだに優雅な独身生活。
俊一 うち父と2人だからね。なかなか来てがないよ。まあ今の暮らしは静かで気楽だし。
安部 もったいないなあ。ちなみにタイプは？
俊一 んー、オードリー・ヘップバーンかな？
安部 なんですかそれ。もっと具体的に。
俊一 おっと、図書館だ。用があるのでこれで。
安部 じゃあ、また連絡します！
俊一 ああ。
ナレーション 結婚を間近に控えてはしゃいでる同僚が何かまぶしかった。同僚と言っても、3つ年下なのをわきまえてるのか、言葉遣いは後輩のそれだ。
そういうわたしにも、実は1人、気にかかる女性がいた。“自分はこのままずっと独りかもしれない”と思っていたのだが、今まで出会ったのとはどこか違う、そんな彼女と言葉を交わすようになったのは、ほんのこの間のことだった。

3(図書館)

斉藤雪子 伊坂先生、ご注文の本入っています。
俊一 あ、ありがとう。いつも悪いね。
雪子 いいえ、仕事ですから。
ナレーション そう言って彼女はほほえんだ。ほほえむと、ふっくらとしたほおにエクボが浮かぶ。彼女の名は斉藤雪子。30を幾つか過ぎたところだろうか。しばらく前から、図書館司書の彼女に、研究の手伝いを頼むようになったが、仕事は迅速で的確だった。“雪子”というその名のように、雪国育ちらしいきめ細かな肌、大きな瞳、温かい笑顔…。だが、その際立った美しさに影を落とすように、右ほおから首にかけて赤みがかかったアザがあった。化粧をしても隠し切れないそのアザは、肌が白いため、かえって目についた。だが雪子は気にしてないのか、隠す風もない。いつの間にかわたしは、その飾り気のない雪子の人となりになりに引かれている自分に気づいた。すると不思議なもので、そのアザにも親しみを感じるようになっていた。
俊一 またなんだけど来週まで5冊、そろえてほしいんだ。これ、メモ。
雪子 はい、でもあの…。
俊一 ん、何？ 僕の字読めない？

雪子 (小さく笑う)もう先生の字、だいぶ慣れましたよ。でもこれは？
俊一 “頼む”の“頼”、いやサンズイの“瀬”かな？ あれ、自分でも読めないぞ。
雪子 ええ？ まあ！（軽やかに笑う）。
俊一 (大声で笑う)
雪子 シ！ 伊坂先生、声が…。
俊一 あ、いけない！（2人、声を殺して笑う）

4(礼拝。賛美歌流れて…)

牧師 聖書をお読みします。創世記 29 章、「ラバンには2人の娘があった。姉の名はレア、妹の名はラケルであった。レアの目は弱々しかったが、ラケルは姿も顔立ちも美しかった。ヤコブはラケルを愛していた。」

…ヤコブはラケルのために7年間働き続けなければなりませんでしたが、ラバンの策略で、ラケルと違って一夜を共にした結婚相手はレアでした。おそらくレアもまた妹から恋しいヤコブを奪い取るために、恐ろしい計画の実現に手を貸したのです。(FO)

ナレーション わたしは1年以上前から、キリスト教史を調べるため、近くの教会の礼拝に出席していた。偶然にも、雪子もその教会の会員だった。ある日曜日、わたしが少し遅れて教会堂に入ると、窓際の席に、雪子はいつものように座っていた。ひざの上に聖書を載せ、幾分顔を傾けて真剣に牧師の話に聞き入っている。

俊一モノローグ ^{ひがめ}僻目かもしれないが、女性にはあまり精神生活がないようにずっと思ってた。だが、彼女だけはそうではないのかもしれない…。

ナレーション 彼女の美しい横顔を見ながら、わたしはふとそんなことを考えていた。

牧師 (FI)…美しくありたいという願いはそれ自体は決して罪ではありません。極めて人間的な願いです。現に今どきの新聞の広告はエステ、数々の化粧品、美顔のための石鹸、サプリ、ダイエット商品で盛りだくさんですよ。美容整形も大繁盛とか。確かに聖書も、ある婦人には“見目麗しかった”という形容詞を用いています。けれども…。(FO)

ナレーション 礼拝後、わたしは雪子に声をかけた。

俊一 こんにちは。

雪子 あ、先生、(うれしそうに)今日もいらしていたんですね。

俊一 聖書の話は興味深いからね。また聞きたくなる。

雪子 そうですか？(小さく笑う)

俊一 今朝の礼拝の話で、当時は一夫多妻が普通だったというのは分かったけど、ラケルとレアは2人ともヤコブと結婚して、それからどうなったの？

雪子 ラケルはしばらく不妊だったんですけど、神様がやっと子供を授けてくれたんです。でも、2人目の出産の時に死にました。姉のレアは次々と子供が生まれて…。

俊一 ん…。

雪子 レアは自分が跡継ぎを産んだことで、ヤコブの愛を得られると思ったのでしょうけど、
そうはならなくて…。

俊一 悲劇だな…。

雪子 …伊坂先生にはご兄弟いますか？

俊一 いや、一人息子だ。

雪子 そう…。わたし、2つ上の姉がいるんです。もう結婚してますけど…。…よくできた姉で、
とても綺麗で。何かわたし、レアの気持ち分かるような気がして…。

ナレーション そう言って彼女は考え込んでしまった。やはり自分のアザのことを気にしているのだ
ろうか。

俊一 んー、いい天気だ。座ってたから体動かしたくなかったなあ。

 よし、雪子さん 行こう！

雪子 えっ、どこに？

5(ボウリング場。)

(効果音) (ボーリング場の“ガコーン”とピンを倒す音。俊一の命中率は低い。)

俊一 (ため息)ダメだ。

雪子 次はわたし。

(効果音) (ボーリング場のピンを倒す音。すべて命中。)

俊一 ストライク！ またあ？

雪子 (笑い)

俊一 こっちが誘ったのに、やられたな。

雪子 マイボール持ってると言うから、どんなにお上手かと…。あ、ごめんなさい。

俊一 いいよ。このスコアじゃね。けど、これでも学生時代は、サークルで一番だったんだ。

雪子 サークルですか、なあんだ。(笑う)

俊一 (つられて笑う)

ナレーション 息を弾ませて笑っている雪子のアザは、上気したほおにくっきりと鮮やかだった。
このボーリングが、2人の仲を急速に近づけた。それからの日々、わたしたちは機会
をつくっては会い、大学の構内のベンチで、教会の帰り道で、公園で、喫茶店で、時
のたつのも忘れて語り合った。聖書の神のこと、雪子が育った北国の秋の紅葉が美
しいこと、冬にたくさん降る雪の鎌倉作りのこと、星座のこと、わたしが飼っていたカブ
トムシのこと…。話題は尽きず、時間は夢のように過ぎていった――。

6(シャレたレストラン)

(効果音) (すてきなBGM)

ナレーション 同僚の安部健作の結婚式の日が来た。式で晴れの二人を祝福したあと、わたしたちは、喫茶店に入った。

雪子 いい結婚式でしたね。

俊一 まあね。でも安部先生の、あの緊張した顔。結婚式では、男はどうも間が抜けて見えるな。

雪子 俊一さんも、その時はそう見えるかもしれませんよ。(笑い)お嫁さん、きれいでしたね。

俊一 まあね、よっぽど…。

雪子 え？

俊一 いや…。

ナレーション 「君の方が綺麗だ」という言葉をのみ込んだ。ライトブルーのワンピースを着た雪子はすらりと背が高く、いつもよりいっそう魅力的だった。

雪子 お料理、おいしかった…。あのマリネ、どうやって作るのかしら？

俊一 料理するの？

雪子 好きなんです。和食が得意。お寿司なんて自分で握っちゃいたいくらい。

俊一 すごいね。

雪子 何がお好き？

俊一 ん…やっぱり和食だな。…母が料理苦手な、仕事もしてたし、子供のころ、よく店屋物^{てんやもの}食べてた。“おふくろの味”ってのに、マジあこがれたな。

雪子 …。

俊一 結構美人なんだよ、母は。この間のラケルの話で思い出した。

雪子 あなたに似てるのね。きっと。

俊一 僕に？ どうか？… 8歳の時に家を出たんだ。おやじの話だと、それから間もなく離婚届が一方的に送られてきて、それっきりだ。

雪子 そう…。

俊一 (話題を変えて)そういや、まだ君の手料理っていうの食べたことないな。

雪子 今度教会のお友達呼ぶんです。俊一さんもどうぞ。

俊一 お、いいね。

雪子 でもこのお店の Pasta、ほんとおいしい。よくこんなオシャレなところに来るんですか？

俊一 一度だけだよ。

雪子 どなたと？

俊一 ん、独りで。

雪子 え？ 独りイタリアン？ それはちょっと…。

俊一 だから「一度だけ」って言ったろ！ 来てみて分かったよ、「ここは独りで来るところじゃ

ない」って。

雪子 それでわたしと？ 今度はどうでしたか？

俊一 満足、満足、大満足だ。

雪子 まあ！（2人、笑う）

ナレーション このまま時が止まればいい…。そう思えた。その時――。

店員 お連れ様はまだいらしてませんので、こちらにどうぞ。

和代 そう。早く来すぎたかしら？

俊一モノローグ あ、この声は…。

ナレーション どこか聞き覚えのある声に、ふと目をあげたわたしは、声の主を見て思わず立ち上がってしまった。そこには、忘れたくても忘れられない母が立っていたのだ。あでやかな和服を着て髪を高く結って、その姿は 30 年前と少しも変わっていない。気配を感じた母は、ゆっくりわたしの方を向いた。

和代 あなた…？

雪子 俊一さん？

和代 俊一、お前なの？

俊一 久しぶり…。

和代 元気？

俊一 …元気だ。おやじも。

和代 そう…。お仕事、何しているの？

俊一 おやじ？ とつくに定年だよ。釣りと読書と…。

和代 いえ、あなたの仕事。

俊一 僕？ 大学で英国史を教えてる。

和代 そう、頑張ってるのね。…そちらは？

俊一 あ、この人は斉藤雪子さん。同じ大学で働いてる。

雪子 は、初めまして。斉藤と申します。

ナレーション その時母は雪子を見つめてかすかにほほえんだようだった。

和代 斉藤さん。…お綺麗な方ね。

ナレーション どぎまぎしている雪子から目を移し、母はバッグの中から名刺を取り出してわたしに差し出した。

和代 今、こんなお店をやってるの。気が向いたらいらっしやい。話したいこともあるし。

ナレーション 名刺を受け取るのがやっとだった。母になんとあいさつして店を出たのか、まるで覚えていない。頭の中は真っ白になっていた。

7(小雨降る舗道)

ナレーション いつの間にか、わたしは雪子と2人、いつも行く公園に向かっていった。雨がポツリポツ

りと降ってきた。

(効果音) (雨の音。次の会話のバックで、少しずつ強くなって。)

俊一 見ただろ。

雪子 え？

俊一 あれが母だ。

雪子 はい。

俊一 出ていった時とちっとも変わっていない。60 過ぎなんだ、あれで。整形を繰り返したんだろう。ああして自分の美しさに執着して…。あの人はいつも自分のことだけだ。自分のことだけ。

雪子 そんな…。お母さんは…。

俊一 (さえぎる) 言わないでくれ！ あの母を「綺麗だ」なんて！

雪子 俊一さん…。

俊一 何も言えなかった。言いたいことは山ほどあったんだ。

雪子 …。

俊一 どうして… どうして僕たちを捨てた？ 愛してくれなかったんだ！

雪子 …

俊一 母さん！（泣き出す）

雪子 俊一さん…。

ナレーション 長い間、封印していた母への気持ちがあふれ出てしまい、わたしはうずくまって泣き出した。止めようとすればするほど、しゃくりあげる自分を完全にもてあましていた。そんなわたしを、雪子は、ただ黙って抱きかかえてくれた…。

(効果音) (雨の音、激しく。)

雪子 もうじき… もうじき角館の紅葉がきれいになるわ。行きましようね…。

俊一 (しゃくりあげている)

雪子 行きましようね、俊一さん。神様が創られた自然を 2 人で見に行きましようね。

ナレーション ささやくようにそう言う雪子の腕の中で、わたしは、なぜか心が安らぐのを感じた。あれはなんだったのだろうか？ 長年のわだかまりを一気に吐き出してカラッポになった心が、何か、魂のふるさとに帰っていくような解放感…。だが、その時のわたしには、あの不思議な感情を説明するゆとりなどなかった。まるで幼子のように、わたしは雪子の抱擁に身を任せていた。肩を震わせるわたしと、抱き抱えて離さない雪子の上に、雨はなおも激しく降りしきった。すべてを洗い流すかのように――。

<前編・終わり>

<後編>

テーマ 人生はドラマ、あなたが主人公です。この度も、「この指ドラマ館」によるこそ。

1(雨の舗道)

(効果音) (雨降り続いて)

俊一 あれが母だ。…出ていった時と、ちっとも変わっていない。

雪子 俊一さん…。

俊一 ああして自分の美しさに執着して。自分のことだけだ…。

雪子 …。

俊一 どうして僕たちを捨てた？… どうして？ …母さん！（泣き出す）

雪子 もうじき… もうじき角館の紅葉がきれいになるわ。行きましようね…。

俊一 (しゃくりあげている)

雪子 行きましようね、俊一さん。神様が創られた自然を2人で見に行きましようね。

(効果音) (雨音、少しずつ弱まり…)

タイトル 岡崎ルツ子作「紅葉のころに」その後編

ナレーション わたしは伊坂俊一。38歳の今まで結婚を考えた女性はいなかった。人形のように美しく、自分にしか関心のなかった母と生き別れたせいか、心の底に、女性に対する根強い不信感があったのだ。だが、おなじ大学で図書館司書をしている斉藤雪子は違った。雪子はその名のように、肌の色が白く、澄んだ瞳と温かい声の持ち主だった。右ほおから首にかけて、目立つ赤みがかったアザがあったが、それを気にする風でもない。同じキリスト教会に通うようになったわたしは、彼女といると、今までに味わったことのない心の安らぎを感じるのだった…。

2(公園で)

(効果音) (公園の雰囲気。親子の声。ブランコの音など)

ナレーション その日、わたしは雪子と公園を散歩していた。

俊一 すっかり秋だな。

雪子 イチョウが色づいて、ほんと綺麗…。あつ。

ナレーション 雪子が突然わたしの陰に身を潜めた。彼女の視線の向こうに目をやると、公園を横切る男女の二人連れが見えた。

俊一 だれ？ 知り合い？

雪子 前に、お見合いした人。

ナレーション ドキンとした。考えてみれば雪子もいい年だ。一度や二度の見合いをしたって、少しもおかしいことはない。

雪子 とてもいい方だったんですけど、会っている時、何かわたしに気を遣いすぎてて。やっぱりアザのことかなって思ってしまった。…断っちゃいました。

俊一 いいよ。そんな男。振って正解だ。

雪子 (小さく笑う) そうは言っても、俊一さんみたいに引く手あまたってわけじゃないもの。

俊一 なんだよ、それ。

雪子 また行きましょうか？ ポーリング。少しは上達した？

俊一 当たり前だ。

雪子 どうだか。(笑う)

ナレーション 雪子はよく笑う女性だ。その明るい笑い声が、母の家出以来、長いこと女性に対する不信感で冷たく凍り付いていたわたしの心を、少しずつ溶かしていたのかもしれないと、わたしは今更のように気づいた。そんな雪子も、いずれほかの男と結婚してしまうのだろうか。そう思ったら、胸の奥がきりりと痛んだ。それでいて、彼女を生涯の伴侶にしようという決心が、まだできずにいる自分がもどかしかった。

3(喫茶店)

(効果音) (入り口のベルが鳴って。)

安部 先生、伊坂先生。先日はどうも…。

俊一 ああ、久しぶり。

ナレーション それは、この間結婚式を挙げた同僚の安部健作だった。

安部 だれかと待ち合わせ？

俊一 ん、まあ。(言葉を濁す。)

店員 ご注文お決まりですか？

俊一 コーヒー。

安部 あ、こっちも。コーヒー2つね。(俊一に) 待ち人が来るまでご一緒させてくださいよ。

俊一 ん？ ああ、いいよ。

安部 あれ、迷惑そうな返事ですね。あ、“待ち人”って女性ですか？

俊一 どうして？

安部 いや、なんだか伊坂先生、感じ変わったなあって。クールじゃなくなったっていうか。どことなく柔らかくなったっていうか…。

俊一 おい、僕の分析なんかいいよ。それより新婚旅行はどうだった？

安部 いやあ、それが散々。思い出の1週間をアツアツで過ごそうと思ったのに、向こうに着いて3日で大ゲンカしちゃって。

俊一 (笑い)

安部 “美人は三日で飽きる”っていうけど、ほんと、その通り。先生も気をつけた方がいいですよ。

(効果音) (入り口のベルが鳴って、雪子入ってくる。)

雪子 あ、阿部先生？

安部 あれ？“待ち人”って、斉藤さん？

俊一 なんだよ。

安部 意外っていうか。へえー…。

ナレーション 安部は、興味津々という顔で、わたしと雪子をジロジロ見た。

俊一 会計、僕が払っておくから、ゆっくりしていけ。(雪子に)行こう、雪子さん。(安部に)それじゃ。

(効果音) (俊一、雪子を伴って喫茶店を出る。ベル音)

安部 あ、どうもごちそうさまです。…伊坂先生と斉藤さんか、驚きだなあ…。しかし彼女、結構綺麗だったんだ。

店員 お待たせしました。

安部 ん、あれ、おれコーヒー2杯飲むの？

4(散歩道)

雪子 阿部先生、驚かれてましたね。

俊一 失礼なやつだな。

雪子 俊一さん、女子大生にすごく人気あるし。皆そう思うのかも…。

ナレーション それきり雪子は黙りこくってしまった。いつもは、時間がたつのも忘れて、2人で話すのに…。

俊一 雪子さん。

雪子 はい？

俊一 まだちゃんと礼を言ってなかった。

雪子 なんの？

俊一 あの雨の日、母と再会して苦しんでいる僕を、親身になって励ましてくれて…そばにいてくれて…。君の優しさがうれしかった。

雪子 …。

俊一 これからも、ずっと一緒にいられたらと思っている。

雪子 …。

俊一 一応、プロポーズ、のつもりなんだけど。

雪子 プロ、ポーズ…。

ナレーション 喜んでくれるものとはばかり思った彼女は、なぜかうつむいた。

俊一 (慌てて)もちろん今すぐということではなくて…。君の信じている聖書の神のことも、もっと知りたいと思っている。君の優しさがどこから来るものなのかも…

雪子 (さえぎって)優しくなんかありません。

俊一 雪子さん…。

雪子 わたし、あなたが思っているように優しくなんかいいんです。姉を… なんでもできて、奇麗で、優しい男性と結婚をした姉のことを、いつもどこかで妬んでいて…そんな女なんです、わたし。

ナレーション そういつて雪子は、ふるえながら自分のほおに手をやった。

雪子 このアザさえなかったらって、何度思ったか…。初恋の先輩が姉のこと好きだったと知った時、本当に悲しかった。姉のことが妬ましくて、苦しくて、“姉さんなんか死んじゃえばいい”って…。ほんとにそう思って…。

俊一 …。

雪子 そんな時、教会に行ったんです。アザがあっても、わたしはわたしでいいんだ、そのままのわたしを神様は受け入れてくださるんだって分かった時、うれしかった。ほんとに楽になりました。…でも…。

俊一 でも？

雪子 ごめんなさい。少し考えさせてください。

俊一 …。

ナレーション 雪子は小走りに去っていった。初めて彼女の心の軌跡を聞いて、彼女もまた、深い重荷を抱えていたことを知った。だが、苦しみの中から信じた神様によって、そこから脱出できたはずの彼女が、なぜ今も苦しんでいるのか、なぜわたしのプロポーズを受け入れてくれなかったのか…。わたしは考えあぐねて、彼女の姿が消えるまで、じっとその場に立ち尽くしていた――。

5(図書館)

司書 伊坂先生、ご予約の本、入ってますよ。

俊一 ありがとう、ん…。

司書 ほかに何か？

俊一 いや…。彼女は今日も休み？

司書 え？ ああ、斉藤さんですか？ あの人なら1週間お休みですよ。

俊一 そうか。

司書 ご伝言があるなら。

俊一 いや、いい。また来る。

ナレーション 携帯にかけても、雪子が出ない。あの日から、わたしと彼女の連絡は全く途絶えていた。

6(教会の礼拝)

(効果音) (賛美歌)

ナレーション わたしは、教会に行けば彼女に会えると思い、次の日曜日、いつものように教会の礼拝に出てみた。

牧師 創世記 29 章、ヤコブは2人の妻を持ちました。美しい妹のラケルとそうではない姉のレアと。レアは次々と出産します。3男レビを産んだ時に、「今度こそ夫も、わたしを愛してくれるでしょう。」と言いました。だが、そうはならなかった。しかし、4男ユダが産まれた時に、彼女は利己心に打ち勝ち、「今こそわたしは神をたたえよう。」と歌ったのです。レアには、真実の信仰がありました…。(FO)

ナレーション だが、教会堂の窓際のいつもの席に、雪子の姿はなかった。目を上げると、聖書を開き長いまつげを瞬きもしないで、牧師の話に聞き入っていた雪子の姿が見えるような気がした。

牧師 神の選択は、決して外見にはよらないのです。美しいラケルではなく、率直に言えば醜いレアが、神の選びにあずかりました。レアはユダを産み、ユダはあの偉大なイエス・キリストの祖先となったのです。…(FO)

ナレーション わたしは、牧師の話に耳を傾けながら、雪子を思った。あの日の別れを思った。雪子も一人の女性だ。顔に目立つアザがあるのを、気にやまないはずはないだろう。でも、それにとらわれるのではなく、雪子をもっと精神的なものを求めていた。神を信じる信仰というのだろうか、それはまさしく、あの聖書の女性レアのようではないか。その姿が、彼女をあんなに美しく輝かせていたのだ。だとしたら、雪子もまた、自らの重荷に打ち勝てるはずではないのか？ それが、なぜだ？ なぜなんだ？——

牧師 (FI)この世には二つの美があります。一つは神が、人の誕生に際して与えたもうた美、花のようにいずれ衰える美。もう一つは、神の恵みにより生まれ変わって与えられる美、この美は、もはや外の姿かたちを超えています。その美しさは決して消えず、永遠に咲きにおうのです。…

7(和代の店。高級クラブ。)

ナレーション 翌日、わたしは母の店を訪ねた。驚いたことにそれは銀座の一等地のビルにある、シャれた雰囲気のあるバーだった。

和代 会いに来てくれてうれしいわ。

俊一 すごい店だね。やり手なんだ。母さん。

和代 (小さく笑う)ここまでになるにも、色々苦労はあったのよ。

俊一 …だろうね。

和代 何か飲む？

俊一 いや、いい。すぐ帰るよ。おやじには、母さんに会ったこと話してないし…。

和代 そう。

俊一 今は独り？

和代　　そうよ。独りの方が気楽だわ。
俊一　　…そうか。
和代　　この前一緒だったお嬢さん、感じのいい方ね。
俊一　　雪子さん？ プロポーズしたけど、返事はまだ…。
和代　　あら、そうなの？
ナレーション　　そう言って母はまたかすかに笑った。間近で改めて見る母は、整形のためか何か不自然で冷たい蠟人形のような感じだった。
俊一　　母さん…。変わってないね。
和代　　あら、それ褒め言葉？
俊一　　そう取っついたほうがいいかも。言いたいことは色々あるけど、今は何だか…。
和代　　…。
俊一　　(はっきりと)母さんがかわいそうだよ。自分の美しさ、若さを保つことにどれだけ執着しているか分からないけど、いずれそんなもの、衰えてしまうのに…。
和代　　…。
俊一　　なんだか悲しいね…。
和代　　俊一…。
俊一　　また来るよ。元気で…。
(効果音)　　(クラブの扉閉まって…。)
和代　　(すすり泣く)(FO)

8(秋田へ)

(効果音)　　(ピーと、秋田新幹線の出発音。)
ナレーション　　わたしは週末、雪子の故郷秋田に向かう新幹線に乗った。
メールや電話ではなく、直接雪子に会いたかった。彼女は以前、苦しむわたしを抱えながら、角館の紅葉を見に行こうとささやいてくれたが、いつしかその季節になっていた。“今、彼女は、美しい紅葉の中に立っているのでは？” そんな思いが、ふとわたしの中をよぎった。
(効果音)　　(山の中。小鳥の鳴き声。せせらぎの音)
ナレーション　　地元の人に聞いたその山は、本当に見事に色づいていた。
肌をさす冷気と、北国の抜けるような青空の下に立った時、わたしはなぜか無性に、この見事な自然を創った“存在”に、呼びかけたい衝動に駆られた。祈りとは、このようにして生まれ出るのだろうか。そして、この存在を“創造者”、“神”と呼ぶなら、この方こそは、人の運命のすべても導いておられるのではないのか？——
俊一(祈り)　　神様…。初めてあなたに祈ります。…どうか彼女に会わせてください。わたしにとって本当に必要な人なのです。彼女が今苦しんでいるなら、慰めを与えてください…。

ナレーション 細い山道をたどってゆくと、背の高い女性が薄手のコートを着てたたずんでいた。雪子だった。かたわらのベンチには、聖書が開いてあった。

俊一 寒くない？

ナレーション 雪子は驚いて振り向いた。わたしを認めると、彼女は静かに言った。

雪子 祈っていたの。

俊一 僕もだ。君に会わせてください、とね。

雪子 …。

俊一 願いはかなえられたよ。…確かにいるんだな、神様って。

雪子 そうよ。

俊一 本当に綺麗だ。

雪子 でしょ？ ここ、意外と知られていないんだけど。若葉のころもすてきよ。

俊一 紅葉もだけど、君も。

雪子 え？

俊一 聖書のこと、神様のこと、もっと知りたいと思う。そして… 君のことも。

ナレーション わたしは雪子に近づいた。雪子はみじろぎもしなかった。優しいまなざし、ふっくらとしたほお、そして赤みがかったアザ…。わたしは手を伸ばして、そっとそのアザに触れた。雪子の瞳が潤むと、涙がスッと一粒流れ落ちた。そして、彼女はゆっくりと、ほほえんだ。それは、あの温かい、懐かしいほほえみだった――。

<完>